

# SMFあぁと！ファクトリー 共鳴する空間 —詩・美術・建築・音楽・ダンス—

2012年10月31日～11月4日 埼玉県立近代美術館 一般展示室ほか

## 〈S〉

MFあぁと！ファクトリーは、埼玉県立近代美術館が今年で30周年を迎えたことを記念する事業のひとつとして、地階の「一般展示室1」で開催されました。これまで、この美術館と関わりながら展開してきた三つのムーブメントがお互いの活動を紹介しながら、それらを相互に共鳴させようというものです。

まずは、ヒアシンスハウスの会の構成による「詩人の夢、ヒアシンスハウス」で、立原道造の建築図面や模型・パステル画などを展示するスペースです。二つ目は「芸術家コロニイの夢 グルグルハウス」、グルグルハウスというアトリエを共有してきた9人のアーティストが、立原道造の詩にインスピレーションを受けて、それぞれに制作した作品の展示。三つ目は、SMFの運営委員が中心となって企画・構成した建築・音楽・ダンスのコラボレーション「部屋を着る／音を灯す／おどりを編む」です。

これはやや偶然なのですが、三つの展示には共通して「ハウス」あるいは「家」という概念が流れていて、場所・空間・身体・表

現について考える「共鳴する空間」になったのではないかと思います。(来場者:5日間計735名)

### 『詩人の夢、ヒアシンスハウス』

この企画は、展示室に入ってすぐの空間に展開されました。立原道造は詩人・建築家でしたが、今回の展示は詩人としての面をあえて見せず、彼の造形家としての面に迫ったユニークなものでした。ヒアシンスハウスの図面・模型・写真をはじめ、実現されなかった豊田山荘の図面と模型、学生時代の設計課題や様式建築の習作など、建築家としての彼のするどい感覚が伝わってきます。さらに20点ほど展示されたパステル画は、彼が色を使いこなす人だったことが理解できました。パステルという素材も、彼のデリケートな詩の世界に通じるといえるでしょう。ヒアシンスハウスの会による活動の紹介もありました。

### 『芸術家コロニイの夢 グルグルハウス』

そんな立原の詩をモチーフとして制作

されたのが、「芸術家コロニイの夢 グルグルハウス」の作品群です。展示室の一番奥にやや閉鎖的な空間を作り、照明を落としたなかに9人の作家による作品が浮かび上がりました。

「溢れひたす闇に」という詩から生まれた作品が3点ありました。どこか西洋風の街並みに不思議なキャラクターが集う川瀬雅子さんの作品、木材を使いながら光と影の対比を生み出す今井伸治さんの作品、仮面・フレーム・布・光・レイヤーが織りなす近藤リナさんの作品です。床を這うような直線と岩石によって強い緊張感を放っていた高島芳幸さんの作品「関係 Oct2012」は、詩「のちのおもひに」から。浅間山麓の土を使った絵画のような井山紘文さんの作品「地異」は、詩「はじめてのものに」の舞台となった信濃追分という場がキーワードになったそうです。壁面に不思議な奥行きを生み出していた服部誠さんの作品は、詩「ひとり林に……」を題材に。壁に立てかけられた障子に「空豆男」と呼ばれる人形のようなものがとりついて十字が浮かび上がる白濱雅也さ

んの作品は、詩「さまよひ」から生み出されました。3本のガラス瓶が標本のように光に浮かぶ伊藤茂広さんの作品は、「何処へ？」という詩から私たちに関わる問題を引き出していました。会場中央にすくと立って赤い衣をはおりながら光を放つ堀部宏二さんの作品は、詩「踊り子」の愛おしさを表現していました。

この会場において、立原の詩の朗読もおこなわれ、詩と美術との交感に厚みが増しました。

### 『部屋を着る／音を灯す／おどりを編む』

展示会場の中央部分に展開されたこの企画は、家具にも都市にも見える段ボールなどで構成された空間が、人びとの制作参加によって日を追うごとに変化・増殖し、その一方では会場などで採集された音や声を再構成してスピーカーから流されるというものでした。

そして最後には、その空間で子どもたちを中心にしたダンスチームが踊りながら段ボールの“街”を壊してしまうというものでし

た。現代の都市生活のなかで萎縮しているように見える空間と身体との関係を、子どもたちの力を借りて開放してみようという試みでした。

美術館での展示準備として空間構成の核づくりを、高砂小学校の土曜日の活動の中でおこないました。そのタイトルは「ひみつきちをつくらう！」。段ボールなどの素材を使い、子どもたちは夢中になって、自分の身体にそように世界から自分の空間を切り出していきました。興味深い作品が次々と生まれましたが、その中から6、7名の「ひみつきち」を美術館に運びました。

子供たちの「ひみつきち」のスケールを、展示室のスケールにつないでいくのが僕たち建築スタッフの仕事でした。ここでは、畳の大きさの8ミリ厚の段ボールを多数用意し、切り込みを入れて自由に組んでいける仕掛けを作りました。さらに、積んだり組み合わせたりしていける小さい段ボール箱のパーツや、SMFのプロジェクトで度々登場している千鳥格子や美術館で不要になったプラ段なども利用しました。

展示期間中、おとなから子どもまでさまざまな人びとが関わって、日々、密度の高い“街”に成長していきました。そこには指向性の高いスピーカーがしまわれていて、ある場所に来ると、ある音楽が聞こえてきて、その音も毎日進化していきました。

さて、最終日ラストのダンスです。テーマは「かいじゅう街に現れる！」。センダックの絵本『かいじゅうたちのいるところ』をモチーフに、15人の子どもたちがSMFでおなじみのダンスユニット「転々」の方がたとともに9月から練習を重ねてきました。会場に“はびこった”段ボール群を少し壁際に後退させて、子どもたちはかいじゅうになりきって踊ります。おもしろかったのは段ボールを“着て”踊るところで、身体から“街”がつかって見え

ました。そして、最後に段ボールの“街”を壊しにかかります。これが意外にいきさきいほどに、あっけなく崩れてしまいました。でもその瞬間、かけがえのないアートが発光したような気がしたのです。

青山恭之 (SMF運営委員)



■詩人の夢、ヒアシンスハウス 企画・構成:北原立木、佐野哲史、高橋博夫、登芳久 / 出品協力:小山正見



■部屋を着る／音を灯す／おどりを編む 企画・構成:青山恭之、柴山拓郎、藤井香、三浦清史

■おどってみよう ワークショップ「かいじゅう街に現れる！」  
9月22日、10月6日・20日・28日、11月4日 埼玉県立近代美術館 講堂ほか 講師:ダンスユニット「転々」

■MOMASサウンドモニターワークショップ ～だれでも今日からアーティスト～  
10月7日 埼玉県立近代美術館 創作室 講師:中村隆行、生形三郎 企画:柴山拓郎 / 協力:東京電機大学理工学部 情報システムデザイン学系 / 作曲:音楽文化研究室

■詩の朗読(白幡の会) / グルグルハウスのアーティストによるアーティストトーク / かいじゅうダンス発表会  
いずれも11月4日 埼玉県立近代美術館 一般展示室

